



小児・発達看護学

教育研究分野

私たちは…

子どもや家族の健やかに生きる力と可能性を生かすための看護を見出し、社会に寄与することを目標としています。子ども一人ひとりのメッセージや体験をしっかり受け止めながら、子どもの健康や発達の状況、家族や周囲との関係などをふまえて、保健医療チームのメンバーとしてその健康を増進するための実践的かつ専門的な看護の役割と機能について追及しています。

また、人は誕生から死に至るまで発達し続けるという生涯発達の考え方を基礎として、人が存在し育つのにどのようなことが大切なかを看護の面から追及しています。



地域貢献

岩手県内の病院、行政、地域の看護職のみならず、養護教諭、学校関係者、福祉関係者など、子どもと家族に関わっている方々を対象に、子どもと家族へのケアの向上を目指し、また自らが自己研鑽する場として、身近な課題やテーマを取り上げた研修会を開催しています。

研修会には、岩手県内全域から参加していただいております。今後も、子どもと家族に関わる多職種間のネットワーク構築をめざしつつ、いつでも、どこでも、確かな看護ケアを提供する小児看護を岩手県内に広げていきたいと考えています。今年度は、小児看護に携わる新人看護師のニーズに応じた知識や技術のスキルアップにつながる研修会を開催します。



教育活動

学部教育では2年次前期に「小児看護学概論」「小児発達看護論」において『子どもたち一人ひとりに子どもの権利が保障され、健康に育ち、自己実現できるための支援を目指した小児看護についての役割』や『小児各期の成長の意義と成長発達の特徴』を学びます。2年次の後期から3年次の前期にかけては「小児臨床看護論Ⅰ・Ⅱ」において『発達段階を踏まえたセルフケア能力を高める支援方法、意志決定を促すケア方法および健康問題をもつ子どもと家族に対する基本的看護援助方法』について講義や演習を通して学びを深めます。「小児看護学実習」では実践を通して『看護援助が実践できるための知識・技術・態度』を修得します。

研究科では博士後期課程、博士前期課程を開設しています。それぞれの課程を修了された皆さんは岩手県内、県外広く各方面で活躍しています。

卒業研究のテーマ

- ・発達障がいのある子どもを育てる親へ向けた支援
- ・地域で暮らす子育て世代の障がいに対する認識
- ・慢性的な経過をたどる患児の母親が入院することで抱える思いに関する文献研究
- ・健康課題を抱える子どものきょうだいに関する研究
ーきょうだい自身の思いと母親から見たきょうだいの視点からー
- ・看護学生が子どもとの関わりに自信をもてたことに影響する要因について
- ・発達障がいがある人の社会参加に向けた自立への支援
- ・子育て期の看護者を対象とした仕事と子育てを両立しながら就業継続することへの困難と支援
- ・看護師が困難であると感じる子どもの家族の対応について
- ・子どものスマートフォン、タブレット端末の使用



小児看護学分野の地域貢献活動



Iwateこども・家族ケア研修会

活動目的

「Iwateこども・家族ケア研修会」は、岩手県内の病院、行政、地域の看護職など子どもとその家族に関わっている方々を対象に、子どもとその家族へのケアの向上を目指し、また、自らの自己研鑽の場や、職者間の連携の場として身近な課題やテーマを取り上げた研修会を継続して開催しています。



活動内容・活動成果

研修会は、事例を用いて子どものフィジカルアセスメントができることを目的としており、討議形式と実践形式を交えた内容としています。最大の特徴としてはシミュレーション人形を使用した**シミュレーション学習**であり、研修において実際にトレーニングを行うことで臨床に活かせる内容であるということです。

参加者の多くは、「小児科に配属になり勉強したい」、「夜勤等で小児科の対応をすることがあり覚えておきたい」、「アセスメントができるようになりたい」等の動機を持った小児科経験の浅い看護師であり、この研修会を受講することで「推論することの大切さ」、「根拠をしっかりと考えることの大切さ」、「異なる考えや観察方法を知ることができた」と感じていました。



今後の課題



アンケート結果には、「家族へのケア」、「フィジカルアセスメントの手技」、「在宅に向けた支援」など多方面にわたる要望が記載されていました。今後も、子どもとその家族を対象とした様々なテーマの研修会を企画し、継続していく必要があります。

在宅ケアの必要な子どもを養育する家族の思い — アンケート調査の自由記述から —

小児看護学分

野

在宅ケアの必要な子どもを養育する 家族の思い — アンケート調査の自由記述から —

○原 瑞恵（岩手県立大学看護学部）
川村 貴子（岩手県立療育センター）、及川 佳子（こずかたこども園）
大和田 毅（岩手県立療育センター/国立病院機構 岩手病院/みちのく療育圏メディアカルセンター）

はじめに

障がいのある子どもが身近な地域でサービスが受けられる支援体制がすめられ、地方公共団体は在宅ケアが必要な子どもが心身の状況に応じた適切な支援が受けられるよう、関係機関との連絡調整を行うための体制整備を努めることになった（厚生労働省, 2015）。

岩手県では在宅ケアを必要とする子どもの医療支援や福祉サービスは都市部に集中しており、身近な地域でサービスが受けられる支援体制はまだ不十分であり、在宅ケアを必要とする子どもの日々のケアのほとんどは家族が担っている状況にある

目的

岩手県内の在宅ケアが必要な子どもを養育している家族の気がかりなことや要望を明らかにし、今後の在宅ケアへの具体的支援を検討する。

「在宅ケア」…家庭と子どもの成長発達に不可欠な環境である保育・療育・教育機関で実施される療育的・教育的なケアや、食事や排泄、清潔に関する日常生活ケアとした。

方法

調査対象者：県内の在宅ケアが必要な子どもを養育している家族

データ収集期間：2019年7月～2020年8月

調査方法：小児科や児童精神科のある病院や障害児通所支援事業所で、同意の得られた家族に無記名のアンケート調査票を配布

自由記述の内容：在宅ケアが必要な子どもの養育への心配や要望

分析方法：家族の心配なことや要望についてカテゴリー化した。

倫理的配慮：岩手県立大学倫理審査委員会の承認を得た。

本研究への協力が自由意思であること、研究に参加しなかった場合にも治療や看護の不利を被ることがないこと、個人が特定されず、プライバシーが厳守されることを家族に説明した。

結果

同意が得られた家族は359名、回収は280部（回収率78.0%）であった。そのうち、自由記述への回答は170部であった。

在宅ケアが必要な子どもを養育している家族の心配なことや要望について、5つのコアカテゴリーが導き出された

- 「子どもの成長発達に伴う心配」
- 「在宅ケアを継続することのつらさや気がかり」
- 「子どもの将来に見通しが立たないことへの心配」
- 「医療や福祉サービスが不足していることへの物足りなさや期待」
- 「社会の障がいに対する理解や認識の低さ」

結果 1 「子どもの成長発達に伴う心配」

- 子どもの運動機能やコミュニケーションなどの成長発達の心配
自分の関わりが適切であるか、治療の効果があるか、子どもの日々の体調変化を気にかける

「将来的にどこまで運動機能や理解力が高まるのか不安に思っています」

「手をかけすぎてしまい、発達の邪魔をしているのではないかと考えます」

- 就学後の学習や集団生活への心配
「普通の中学校を選んだが、支援学校のほうがよかったが悩んでいます」
- 成長に伴い、抱っこや入浴介助が困難になることへの心配
「体も大きくなって、お風呂を入れるのも大変です」

結果 2 「在宅ケアを継続することの つらさや気がかり」

- 協力者がいなく一人で子どものケアをすることや
子どものケアと介護の両立、休息ができないことへのつらさ
「自分自身が倒れたら…」
「いつも目が離せない」
- ケアが生活の中心になり、きょうだいに関わる時間が少ないこと
「きょうだいにだって目や手をかけてあげたいです」
- 子どもの通院や体調変化による仕事の継続や経済的な不安
「復職後の預け先が心配」
「常に入院するかもという不安があり、安定した就労につながらない」

結果 3 「子どもの将来に見通しが 立たないことへの心配」

- 親が面倒をみられなくなったときや頼りきりの生活、
高校卒業後の就労や施設利用など社会に順応し自立できるのか、
見通しが立たないことへの心配

「子どもがひとりになったときに手助けしてくれる施設や人がいるのか？」

「将来どの程度自立できるか」

「親がなくなった後、子どもは幸せに、笑顔で生活できるのか」

結果 4 「医療や福祉サービスが不足して いることへの物足りなさや期待」

- 日中一時支援事業やショートステイが利用できない
緊急時の預け先がないことや、保育園に入園できないこと、
通園や通学の送迎による困難
- 医療や福祉、教育の横のつながりが少なく、
地域格差が大きく医療や福祉サービスが選択できないことや、
施設利用することへの不安

期待

- 医療や福祉サービスの相談や情報提供を受けられる
- 子どもの状態や家族の状況に合わせた日々のサービスと緊急時に利用できるサービスが増える

結果 5 「社会の障がいに対する理解 や認識の低さ」

- 周囲の人に対する病気への理解不足や配慮のない言葉や、
在宅ケアへの認識の低さからの地域で生活することへの生きづらさ
「世間の配慮のないことばに傷つくことがある」
「認知度が低い病気のため、なかなか周りから理解してもらえない」
「迷惑かけたら悪いと思われ、周りの目を気にして本人の行動を制限させてしまう」

考察

- ◆ 家族が子どもの成長発達を実感でき、将来に少しでも見通しがもてるよう説明をする
- ◆ 家族個々がもっている在宅ケアを継続することのつらさを把握する
- ◆ 身近な地域での障がいに対する理解を深め、安心して医療や福祉サービスを利用できるように情報提供をする
- ◆ 子どもの状態や家族の状況に合わせた日々のサービスや緊急時に利用できるサービスがさらに増えることを期待する

結論

在宅ケアが必要な子どもを養育している家族が子どもの成長発達や将来への心配を抱え、在宅ケアの継続へのつらさを実感していた。

そのような家族の気持ちを認識し、日々のケアのサポートや緊急時の対応について、さらに地域での医療や福祉サービスの相談や情報提供をすすめていく必要性が示唆された。

本研究は、科学研究費助成事業若手研究の助成を受けて実施した。また、第14回若手看護学術研究会で発表された。